書籍掲載用

花菖蒲の写真の撮り方

加茂花菖蒲園　永田 敏弘

花菖蒲の美しく咲く時は一瞬です。このため多くの人が写真でこの花の美しさを知ります。私の場合は「最新花菖蒲ハンドブック」が最初のそれで、初めて見たときは驚きました。ほかのも「花菖蒲大図譜」や、「花菖蒲銘花集」など、長い花のないシーズンにはこうした写真を見て楽しんでいました。古い協会の会報にも、西田衆芳園や平尾先生などが、立派な写真を紹介されておられます。このように花菖蒲の立派に美しく咲いた姿を撮影し紹介することは、この花の文化を伝えるために絶対に必要で、これから先も誰かが美しい写真を撮影し紹介してゆかなければなりません。そのためここでは、書籍掲載に使えるレベルの、花菖蒲の花の撮影方法をご紹介しました。

どのカメラで撮影するか

デジタルカメラの場合はレンズ交換が可能で背景をきれいにボカすことのできるデジタル一眼レフを使います。画素数は現状で一千万画素程度以上はほしいです。高画素機種の描画はさすがで、画面の艶や立体感も出るような気がしますします。

フィルムカメラの場合は一眼レフでリバーサルフィルムを使用し撮影します。

フィルムカメラの場合は、本体、レンズとも比較的安価なものでも無難な画が撮れますが、デジタルは三五ミリフィルムカメラと約同等の解像度の画像が得られる機種が、まだやや高価なのが欠点です。このためフィルムカメラで撮影し、デジタル化したい場合は程度の良いスキャナで読み込むという手も十分に考えられます。

デジタルカメラでお金を掛けたくない場合は、例えばキャノンならＫＩＳＳデジタルに50ｍｍＦ1.8の単焦点を填めても、使い勝手はイマイチですが、綺麗な画が撮れます。

レンズ

レンズの選定も本体同様とても重要です。本来は単焦点レンズで三脚を立てて撮影すると、非常に解像度の高い画が得られます。しかし、短い開花期に微妙な撮影角度を瞬時に見極めながら多くの花を撮る必要があるので、三脚は煩わしく、手持ちのほうが楽です。また、花菖蒲園で近くの花も少し遠くの花も撮りたい場合もあるので、写真のクオリティーは下がりますが、ズームレンズのほうが実際に便利です。そこで、近場の花には二四～七〇ミリ程度の標準ズーム、花菖蒲園などで少し離れた花を撮影する場合は、七〇～二〇〇ミリ程度の手ぶれ防止が付き望遠ズームを使い、手持ち撮影します。

なお、ズームレンズは昨今の主流で、中にはとても安価で良い製品もありますが、例え本体が高性能であってもレンズの良し悪しで画質にかなりの差が生じます。この現象はデジタルでは特に顕著に反映され、出来上がった画像を見ると、その鮮明さ解像感の高さなどに歴然たる差が出て驚きます。このためデジタルカメラの場合は、キャノンであればＬズームなど、高性能で、単焦点に近い描画力を誇るズームレンズを使用すると良いと思います。

フィルム

フィルムカメラの場合は、フィルムにより発色に違いがあり、青色系の表現性に優れたものや、赤色の発色があざやかに表現するフィルムがあるので、撮影する花色によってリバーサルフィルムを選択します。例えば青紫色の花にはフジカラーのプロビアやベルビア一００Ｆ。赤紫色の花にはベルビアの５０などを使い、花曇の光の下で撮ると、赤紫色が鮮やかに写ります。

撮る前に、花菖蒲を知る

平尾先生が生前加茂元照氏に「加茂さんの写真は勢いがあって良い」と常々褒めた

江戸古花の「泉川」平咲きなので本来なら斜め上から撮るべきだが、江戸の粋を表現するため、あえて花に対して真横に近い位置から、すらっと伸びた花茎を入れて、粋な趣を強調した。安価なフィルムカメラでレンズも機能優先型だが、フィルムカメラならこれで十分。
(EOS 7　プロビア 100 F　EF24 - 105mm F4 L IS USM)

そうです。加茂氏は花菖蒲は江戸の端午の節句の祭りの花だから、祭りの花らしい勢いの良さを撮るべきだと考えました。氏は平尾先生から直接花菖蒲を教わった園の経営者ですが、このように、花菖蒲とは何か。どこが美しいのか。どのような思想が骨格となって創造されてきたものかが肌でわかってくると、どのように撮れば良いのかも自ずとわかってきます。一朝一夕というわけにはゆきませんが、花菖蒲を知りながら撮り続けることで、少しずつ撮影のコツが掴め腕も上がってゆくので、写真撮影はとても楽しい作業です。

花菖蒲はなかなか良い花形に咲かず、撮る角度によっても全く別物に写ります。品種の特徴を表し、かつ日本的な美と情緒、そして生命を持つ花の輝きや感動の瞬間をとらえたいものです。

撮影環境

屋外の自然光で花曇の日に撮影することで、もっとも無難に撮れます。撮影当日だけでなく、前日も強光の晴天や強風や雨天でないおだやかな天気で推移したことが撮影の条件です。

写真が撮れる環境

前日が曇りで、当日は花曇りの午前十時から正午までがベスト。これを極力厳守します。難しそうですが、梅雨は案外こんな日が続きます。花弁の乱れもなく、わずかに太陽光線がかかることでコントラストが生まれ、花の輝き、明るさや勢いを表現できます。正午近くなるとその日の気温、湿度、日射により異なりますが、花弁の水分が蒸発し花に元気がなくなるので、これを感じた時点で撮影を止めます。

曇りの日は朝九時頃から撮れ、そのまま無風の日は午後になっても花の乱れがないことが多く、午後二時頃まで撮れます。

撮れない環境

強い直射光の日。コントラストが強く出すぎるので全く撮れません。風も出やすく、花が萎れ見られません。前日に天気が良すぎた日も、痛んでおり撮れません。

朝九時前と午後二時以降、光線の関係で赤または青に傾きやすいものです。

雨は叩かれると花が痛むので降り始めの小雨まで。雨後は、降雨後に咲いた花が二日目を迎えるのを待ちます。このように、自分の都合でなく花に合わせます。

撮影する花を選ぶ

開花二日目の、品種の特徴が表れかつ良い花型に咲いた花を、いちばん美しく見える角度から撮影することが最大のポイントです。撮影する花選びがとても肝心で、撮影者の頭のなかに、良い花形の理想・基準があることがものすごく重要です。一日目の花は花弁が伸び広がらず品種の特徴が表れていませんが、花色は濃いので濃ピンクやブルーを感じさせる紺色の花などの特徴を写したい場合は開花一日目に撮影します。また開花三日目は、花弁に力がなくなり時間の経過とともに縁から萎みはじめるので控えます。

開花２日目の花　やや暗い曇天での撮影　正面から端正な感じに写したもの。端正な花形を持つ品種に向く。こういう花形を選ぶことが大切。

中央の花弁をややずらせた位置から。立体感が表現できるので、動きのある花型に向く。もう数度でも右に傾くと、花弁の隙間が目立ち下品になる。

悪い例。カメラを構える位置が中心になる花弁に対して右にずれており、花弁と花弁の隙間が見えすぎている。芯の形もいまひとつわからない。

上の花の開花第一日目の様子。花弁がまだ伸び広がらず、本来の花型が表れていない。しかし、開花２日目に撮れない場合を考え、押さえで撮っておく。実生花
(EOS 1Ds Mark II　EF24-70mm F2.8L USM)

長井古種など単純な花容の種類は、一輪を撮るよりも群生美を表現したい。この場合、満開時よりもやや早めのほうが勢いのよい姿が撮れる。上の写真はやわらかな光線によって少しコントラストが上がり、花の勢いや輝き、瑞々しさを表現できたように思う。光は花を輝かせるが、強いとコントラストが出すぎ写真にならない。
長井小紫（EOS 1Ds Mark II　EF70-200mm F4 L IS USM）

花の特徴と撮影角度

個々の品種にはそれぞれにその品種ならではの特長があるので、その部分を理解して撮ります。例えば伊勢系など花弁がよく垂れるものは、その特徴を意識して花と同じ高さ程度にカメラを構えます。平咲きや受け咲きの品種は、花全体がわかるよう、ななめ上から全部の花弁が見えるように撮影します。

また、三英咲きの特に単純な花容の品種は、鉾がピンと立った花を撮ります。鉾が寝ていると元気がないような感じになり絵になりません。寝ている場合は手で起こします。見落としがちですが重要な点です。

肥後系は堂々とした趣と、白花などは気品の高さを強調して。特に肥後の八重咲きなどはなかなか良い花形に咲かないので、まとまった花形でかつ八重だとわかる花を選んで撮ります。伊勢系は上品さ繊細さを、蜘蛛手や縮緬地が特徴の品種は、それを意識して。江戸系の単純な花容の品種や長井古種は、明るさ勢い、群生の美しさを強調します。

次に、撮影する角度を見極めます。花菖蒲は花首を僅かに傾けて咲くので傾けた側の花弁を中心にするのが一般的ですが、花が形良く美しく、芯や鉾の形もよく見える角度を探し、角度を微妙に変えながら撮ってゆきます。僅かな角度の違いで、上品にも下品にもなります。とても微妙なので三脚を使っていると貴重な時間が失われます。よって手持ち撮影がベストです。

背景の処理　白花や淡色系の大輪花などは、バックに暗幕をあてて撮影すると、その優美で端正な花が一層引き立つ。実生花
（EOS-1Ds Mark II　EF24-70mm F2.8 L USM）

大切な背景の処理

被写体を引き立たせる目的で、背景の処理は被写体同様に気を使います。背景は手軽で花を引き立たせるという意味から、花菖蒲の葉のグリーンで統一すると良いと思います。また大輪の白花系などは暗幕を使っても花が引き立ちます。背景は花を際立たせるため、美しくボカします。このため美しいボケが得られる一眼レフのカメラが必要になります。

そのほか注意する点

背景部分に入ってくる目障りになる他の花や、花弁の傷み、花が終わったしぼみ、枯れた葉、被写体に関係のない家屋、風景などが入らないよう、写す段階で十分に注意します。撮っているときは被写体に意識が向いているため気づかない場合が多いですが、仕上がった写真を見て落胆することがままあります。花菖蒲園では邪魔な他の花や萎みに苦労します。ただ自生地では、萎み花があるのが本来ですから、私は萎みを取り去ることなく撮っています。

カメラ側の撮影モード

オートでは撮らずマニュアルフォーカスモードにして、絞り値を8程度に設定します。この状態で花がある程度大きく画面に収まるまで近づき、花の一番手前の花弁基部の黄色い目の辺りにピンとを合わせると、花全体にほぼピントが合い、背景が適度にぼやけたように撮れます。

暗い曇りの日など絞り値が8では手ぶれや被写体ぶれがきそうな場合は、絞り値を5.6位にする。フィルムやデジタルのISO感度を上げるなどで対処します。

露出補正

白系の花はプラス補正、濃紫の花はマイナスの補正をして撮影します。が、なかなか適正露出が掴みにくいので、白花なら＋0.5、＋1、＋1.5のように、同じカットを三段階ほど露出補正して撮影します。カメラの絞り値を変えたり、角度変えも含めると何カットにもなります。私はこれはという花の場合は、一輪を三十枚くらい撮ることがあります。

デジタル画像の保存モード

画像の保存形式はJPEGが一般的ですが、再保存の度に画質が劣化するので、原画は圧縮しないTIFF形式で保存しておいたほうが良いです。またレタッチを考えRAWでも撮っておいたほうが良いのでJPEGとRAWが同時に撮れるカメラが便利です。

終わりに

難しいことをあれこれ書き並べましたが、部分的にでも参考にしていただければ幸いです。花友の談ですが、同じ品種でもその年の咲きぶりによって、良く撮れたり撮れなかったり、出来上がった写真を見比べ試行錯誤し、一つの品種でも何年も何年も撮るうちに、まあまあこれだったら良いかなあという写真が撮れてきます。そして、こんなふうにして徐々にコツがつかめて腕が上がってゆきます。よく撮れた写真は、撮影者の努力の結晶であり財産です。それでもいつまで経っても一年生ですが、このあたりが奥が深く面白く、写真を撮る楽しみでもあります。

最後に、感動を写してください。感動を持って写した写真は、見る側を感動させます。逆もまた然り。その写真を見た者が花菖蒲に興味を持つか否かは、撮影者の感動にかかっています。

絞り値5.6で撮影。後ろの花弁もボケかけているのがやや難だがバックはかなりボケていて雰囲気は良い。また絞り値8に比べシャッタースピードが早くなるので、曇天など光がやや暗い場合にも好適。(EOS 1Ds Mark II　EF24-70mm F2.8L USM)

絞り値8で撮影。花弁のほぼ全体にピントが合う。絞り値をより上げると、花にピントは合うが背景まで鮮明になり、画面が煩雑になってくる。またシャッタースピードも遅くなるので、手持ち撮影では手ぶれしやすくなる。実生花